平成２９年度　ＳＲＨ海外研修報告書

目　的　　現地の大学や研究施設、企業などを訪問し、研究者や学生との交流を通して、幅の広い対話体験を積むことによって「科学的探求力・発展的対話力・論理的思考力」の３つの力を育成し、世界で活躍しようとする志を立てる糧とする。

実施期間　　３月４日（日）～３月９日（金）

参加人数　　１７名（男子１１名、女子６名）

内容は以下の通り

３月４日（日）

盛岡駅発（０８：００）

盛岡駅で副校長による激励の言葉

仙台空港発（１３：００）

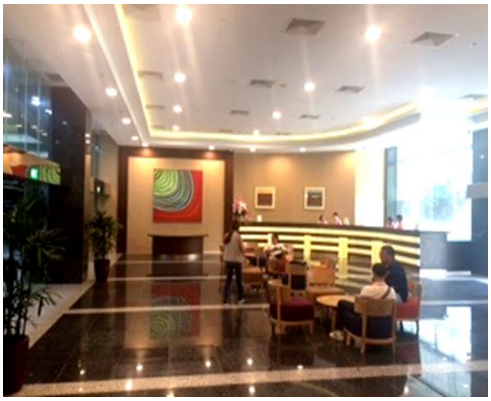
今回は韓国のアシアナ航空を利用しました。

出国前の集合写真

仁川空港発（１６：２０）

チャンギ空港着（２１：４５）

ホテル(Hotel Chancellor Orchard)へチェックイン（現地時間２３：３０）



３月５日（月）

マーライオンパーク（１０：００～）

シンガポールの中心部にあるシンガポールの“ランドマーク”とも言うべき公園。周りにはマリーナベイサンズ等の高層ビルが立ち並び、シンガポールが約 50 年で大きな発展を遂げたことを感じることが出来た。

シンガポール国立博物館（英語ガイド案内）（１１：１５～）

1887 年開館のシンガポールで最も古い博物館で、シンガポールを象徴する建物。

博物館内は物語形式で過去と現在の様子を伝え感動的な展示物を集めた常設展が設けられている。ガイドが全て英語だったので、生徒たちは分からない言葉を何度も聞き直していた。日本統治時代展示部分は日本人として複雑な思いを抱かされたが、シンガポールと日本との関係や建国までの歴史がよくわかった。

ホーカーセンターで各自昼食（１２：３０～）

ホーカーセンターとは、日本でいうとショッピングセンターのフードコートのようなもの。１つのホーカーセンターには、中華系、インド系、韓国系、西洋系、日系のものまで実に様々な種類の店がひしめき合っている。この日は「ラオパサ」というホーカーセンターで昼食を取った。

旧フォード工場記念館（１４：００～）

シンガポールの戦争の歴史を知ることができる施設。戦時中に山下奉文将軍がイギリスのパーシバル将軍に、「イエスかノーか」と降伏を迫った旧フォード工場の跡地に建てられている。展示名は「日本の占領を生き抜いて：戦争とその遺産」であり、日本がシンガポールを占領していた歴史や占領時の様子が展示されている。シンガポール国立博物館と同様に複雑な思いを抱かざるを得なかったが、きちんとした歴史的背景を知ることで謙虚な気持ちで研修に臨もうと思い直すことができた。

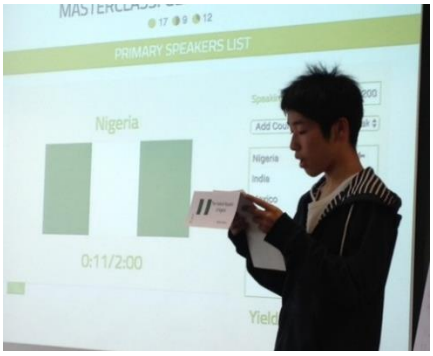
ボタニックガーデン（１６：００～）

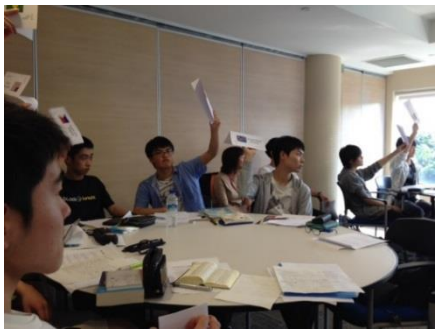
2015 年 7 月にシンガポールで初めて世界遺産に登録された庭園である。気温は２９度で晴れであったため、広大な園内を歩き回るのはかなり過酷である。今回は、世界最大級のラン園を中心に見て回った。

３月６日（火）

ＮＵＳ（シンガポール国立大学）

世界大学ランキングでアジア No.1 の評価を受ける国際色豊かな大学。11 の学部とスクール、その他様々な施設が緑に囲まれた広大な敷地内に集まっている。ここで、生徒は午前午後にわたり、摸擬国連体験としてマスタークラスプログラムに参加した。模擬国連に参加する際に必要な“ルール”、模擬国連の開始手順からテーマ設定、発表の仕方、議決採択手順等の知識を学び、実際の模擬国連を想定しながら、自らの価値観、主観を超えて物事を考えるトレーニングを行った。このプログラムに参加することで、世界のことを学ぶだけでなく、日頃の学校の授業では体験できない、インターネットを通して溢れる情報から有益な情報を得るためのリサーチ力、限られた時間で意見を述べるプレゼンテーション力、一つの問題に対する多角的見解力と、模擬ロビー活動を通してのリーダーシップ力を育成することが出来た。





３月７日（水）

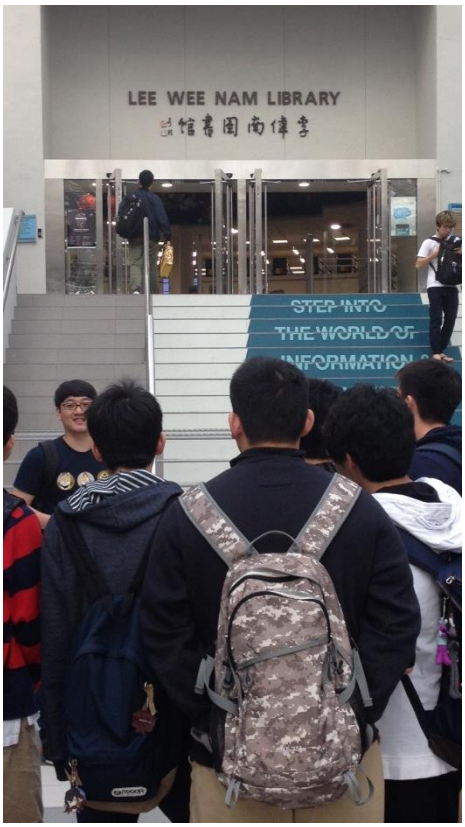
NTU（南洋工科大学）

NTU はシンガポールの南西側に位置し、200 ヘクタールの敷地（シンガポール最大かつ工科系大学として世界最大級：参考： 北海道大学の敷地面積は 177 ヘクタール）の中で、23,500 人以上の学部生と 10,000 人の院生が教育を受けている。大学はエンジニアリング、サイエンス、ヒューマニティ、アート＆ソーシャルサイエンス、メディカルの 4 つの「カレッジ」から構成され、各「カレッジ」の下に日本での学部に相当する「スクール」が属している。

この日は海外研修のメインイベントであるポスターセッションが、NTU で実施された。出発前に準備したポスター7 枚を中教室の壁に貼り、NTU の学生が 15 人位と、指導者 2 人が 7 つのグループに分かれて 1 枚当たりに 15 分位掛けてローテーションしてもらった。1 人の班が二つあり、その生徒は 7 回も 1 人で説明だったので、大変だったと思う。プレゼンの出来は、発表する生徒の英語力に大きく左右され、参加した生徒は英語学習の大切さを再認識していた。

最後に 2 人の指導者から助言を頂いた。概ね褒められたが、プレゼンの姿勢や、ポスターの作り方について細かく指摘された。

ポスターセッションの後は NTU の学生に施設を案内してもらい、カフェテリアで遅めの昼食を取った。



３月８日（木）

フュージョノポリス（９：３０～）

フュージョノポリスとはシンガポール政府が高付加価値産業の拠点として開発を主導する「ワンノース」に２０１５年新たにオープンした最先端研究施設。シンガポール科学技術研究庁（A*STAR）等も携わり、「Synthesis」「Innovis」「Kinesis」の３セクションに分かれて研究が進められている。

訪問した際は、スマートフォンを利用した音声出力の技術、脳波でコンピュータ操作をできるようにする技術などを見学できた。

BLOCK71（１１：００～）

「シンガポールのシリコンバレー」と言われる起業家育成を目的として作られたシンガポールのスタートアップ集積地。シンガポール国立大学(NSU)が主導で５年ほど前に取り組みを始め、今では２５０社以上の IT 関係のスタートアップや３０以上のベンチャーキャピタルが入居。さらに隣接する「BLOCK73」や「BLOCK79」も同様にスタートアップ入居施設となり、３施設合わせて約７００社以上が集まっている。今回は BLOCK71 にある以下の２社を訪問し、英語で説明を受けた。起業家を目指す若者達の姿や思いに触れることができた。

① 「MONO」

企業概要：日本向けの企業、日本の企業のアジア進出、ローカル企業の日本への進出をサポート、アジアのコーワーキングスペースとして BLOCK71 を活用している。

主な活動：スタートアップ事業の為の情報やネットワーク、活動のスペースの提供、東京 MONO と協力しイベントの開催や、情報の共有。

②「Red Dot Drones」

企業概要：ドローンレイシングを観客向けに Youtube や Facebook を通しライブストリーミングするレースキャスターを作成

主な活動：ドローンのイベントなどを開催（ドローンレイシングやマイクロドローンを飛ばすミートアップイベントなど）

ホーカーセンターで各自昼食（１２：３０～）

この日は「マクスゥエル」というホーカーセンターで昼食を取った。

JTBAP・JTB シンガポール支店（１４：００～）

グローバル企業としての JTBAP（アジアパシフィック）・JTB シンガポール支店において、現地社員の高須賀務さんより講演頂いた。JTB に入社した経緯や、クロアチアでの企業の話はとても興味深く、講演後も生徒達からは多くの質問が出され非常に有意義であった。

MRT(地下鉄)で移動 → チャンギ空港発(２３：００)→ 仁川空港発(９日　９：３０)

→ 仙台空港着(１２：００) → 盛岡駅着（１５：３０）→ 解散

生徒レポートより

A 君　今回の研修では、まず英語力を身に付けて自信を持ち、どのような環境・状況でも自分の意見を主張する能力が必要だと思いました。海外ではあいまいな表現が好まれないため、日本のように相手に理解を仰いだりゆだねたりするのではなく、“Yes”なのか“No”なのかをはっきりさせなければいけないと思いました。研修後半は、自分から積極的に話しかけてどこの店がおいしいかなど聞いて回りました。初めていく土地で失敗しないためにも、不安になったり外れを引きたくなかったりする場合には、ローカルの人に話しかけることをお勧めします。

また、その土地に早く慣れるために下調べをした方が良いです。シンガポールでいえば、罰金が多いです。そのため、道路の渡り方、特に道路標識を調べておくべきだと思います。外国にしてはきれいに整備されていたので、いつか観光でまた行きたいと思います。

B 君　海外研修では大きく二つのことを学びました。一つは海外では「個の尊重」が重要視されているということです。JTB のシンガポール支部で実際に働いている方のお話を聞いていて、とある質問をされました。「日本人の前で英語を使うのが恥ずかしい人は手を挙げてください。」手をあげました。褒められました。意味わかんなかった。自分の意見、考え等々をちゃんと表現？表示？できる人は良いとのことです。確かに。と思いました。日本人の意識は非常にネガティブであり、はみ出していても周りからの圧力によって縮こまってしまわざるを得ない気がします。簡単そうに見えて意外とできていないです。今後、必要なのは他人を認めることだと思います。もちろん、周囲の人も僕のことを認めなければ何も始まらない。

もう一つ大きな学びがあります。それは、「受験英語は通用しない」です。シンガポールに到着して 2 日目、3 日目。道を尋ねて教えてくれたこと、レジの人が言っていること、全然わかりませんでした。僕も、何か言おうとして考えているときは、疑問詞が・・とか、動詞がこれでそれら・・と考えていましたが、あることに気づきます。「日本語で覚える英語」ってなんだ？と。主語があって動詞があって目的語やらなんやら文法に当てはめて。そう考えるのをやめたら、驚くくらい街中の外国人と話せるし、言いたいことが伝わるし、ホーカーセンターのおばちゃんと笑いを共有できるし・・・一石∞鳥！相手が何を言っているか正確にはわからないけど、何を言いたいか分かるというほぼパラドクスの世界。楽しかった。

そんなことを一人ぼやいていても受験方式は変わらないので、それはそれでおいておいて、日本でこの後何年生きるかわからないので、受験のためにちゃんと勉強します。

いろいろ脱線してしまいましたが、まとめると、体で英語に触れた先に本当の英語の楽しさであったり、大切さを感じ取ったりするんだなぁと思いました。たった 4 日くらいしかいなかったのにとても貴重な経験でした。

C 君　３日目…この日は模擬国連があった、一日中英語でコミュニケーションしていたので非常に疲れる一日であった。実際に模擬国連のデモをするまで、授業のような形式でイントロダクションをされた。ここにとても大きな環境の違いが見られた。日本の授業より生徒の反応が授業の多くを占めるのだ。おそらく、生徒と先生との距離が近いイメージが強いのだろう。（今回担当してくれた先生が大学の学生であったことも考慮して）もちろん先生への尊敬もある。要約すると、「失礼」に対する感覚が違うのだ。日本人は相手を尊重するあまり、自己主張がとても少ない状況が多い。しかし、ここでは自己主張をしないということが失礼という感覚であるのだ。根拠として、反応がないという状況に少なからずマイナスの感情が現れていたことが挙げられる。コミュニケーションをと

る相手として対等な立場とお互いを認めることがコミュニケーションを進めるのに一番必要なことであるから、そうすることが正しい礼儀と考えているのではないだろうか。うまく説明ができないのだが、日本より過程より結果を重んじる感覚がにじみ出ていたような気がするのだ。目的を達成する過程を礼儀やマナーに組み込む感覚が日本人としてとても新鮮であった。自分も議論の立場に立って、それを妨げるような礼儀やマナーというものにとても違和感を感じた思い出がある。個人的にとても参考にしたい考え方であったと言いたい。少なくとも日本の過度な礼儀への感覚が目的達成の妨げになりうることを否めない。伝統や文化と目的達成への合理的な考え方のどちらを捨てるかということをもう少し真面目に考えるべきであると考える。

四日目…この日は研究発表が主であった。日本愛好会の方々の対応によって成功したと思う。研究や発表に関して多くを学べたからである。三日目の学びの根拠となり得るようなことがあるので記述する。聴衆の態度が心地いいのである。結果に対して驚く仕草など感情を表に出すという動作が発表側には嬉しい。反応をしてくれない人達もいたが、興味を意図的に示してくれるので発表という形であったがコミュニケーションをしているような感覚であった。また、発表に対する評価では発表者側の言葉に色が感じられない、感情が読み取れないと評価された。聴衆側の違和感は感情の読み取れない堅苦しい発表で対等な立場として意思疎通ができなかったことからくるのではないだろうか。この差は先ほどの選択の話にもつながる。対等な立場であるはずの二者に差があればしにくい選択というものが少なからず出てくるからだ。あの場で私が感じた発表がコミュニケーションに思えたという感覚は私だけであったのである。この差はよく日本の文化によって生まれると云われるが、そうであるとすればこの文化は捨てなければいけない。日本人のパーソナルスペースは広すぎるのだ。これでは閉鎖的な集団ができやすく全く生産性を望めない。＜中略＞

話を戻すが、今回の研修で日本人の意思疎通における長所も見つけられた。それは比較的細かい表情を読み取れるということである。しかし皮肉なことにこれは表情をあまり出さない共同体の中で生活してきたおかげである。ここまで、意思疎通のことについて話してきたが、このような差異はどのようにして根付いてきたのだろうか。もちろん、言語の違いによるものも大きいであろうが、それは差異が生じる要因であって、ここまで伝統的に続く要因でないはずである。これは、幼少期に育った環境などでその人の人格形成に影響が及ぶことによるのてはないか。多様性を認めにくい社会で個性というものは生まれない、個体差は生まれても個性ではない。＜中略＞

今回の研修の意味は、個性という観点でその考え方に違いがあるものとコミュニケーションができたことだ。研修なのであるから、自分たちの海外への新鮮な眼差しは反射されて自分たちに向くはずだ。まとまりのない文章で研修を通して考えたことを列挙しているが、レポートとして反省的な位置にとどまれば、役割は果たすだろう。